

## 甲府城 山梨県甲府市丸の内 1-5-4

天正 10 年（1582）甲斐国は戦国大名・武田氏の滅亡後、まず織田信長の領国となり本能寺の変の後は徳川家康の支配するところとなった。しかし、豊臣秀吉が天下統一をした後は秀吉の命令により甥の羽柴秀勝、腹心の部下である加藤光泰らによって築城が始められ、浅野長政・幸長父子によって完成をみる。また、慶長 5 年（1600）関ヶ原の戦い以降は再び徳川の城となり幕末まで存続したので徳川所縁の城として紹介します。

甲府城は江戸時代の初めは、将軍家一門が城主となる特別な城でしたが、宝永元年（1704）時の城主徳川綱豊が第 5 代将軍徳川綱吉の養嗣子となり第 6 代将軍家宣となり江戸城西の丸へ移り、その後は甲斐出身で側用人の柳沢吉保が城主となり、大名の城として最も整備され城下町とともに大きく発展しました。しかし、吉保の子・吉里が大和郡山城主として転封された後は、甲斐国は幕府の直轄地となり甲府城は甲府勤番の支配下におかれました。その間、享保年間の大火により、城の本丸御殿や銅門を焼失するなど次第にその壮麗な姿は失われていき、現在も天守などはなく石垣が立派に残っている。（説明版）



現在、濠の先端を工事中



概略図と説明版



鍛冶曲輪門



二の丸曲輪から鉄門への道



鉄門(くろがねもん)



天守台



天守台の石垣



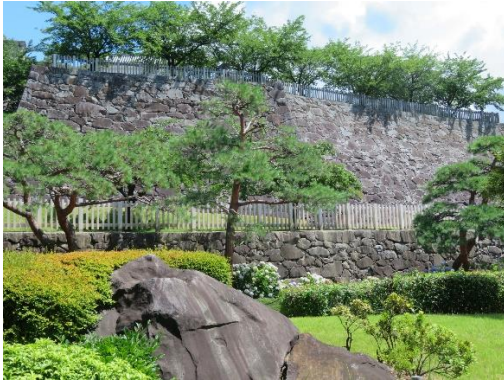
天守台から本丸跡



本丸西の銅門(あかがねもん)跡



銅門を出ると急な勾配



二の丸から本丸石垣を望む



二の丸から右手の天守台を望む